Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-24

文化財を支える人材育成 : 神戸市埋蔵文化財センターのボランティア育成から（フィールドリポート(2)）

渡辺, 伸行

(Citation)
Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報,3:77-81

(Issue Date)
2011-08

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81003372

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81003372

KOBE UNIVERSITY

Reports from the Field 2

文化財を支える人材育成
――神戸市埋蔵文化財センターのボランティア育成から――

渡辺　伸行

はじめに

平成十六年度から公の施設に指定管理者制度が導入され、各施設では、外部の評価者からそれぞれ施設の有効性を高める方策が求められていた。

神戸市埋蔵文化財センターでも、市民に開かれた文化財啓発施設として、同様に時代適合性・効率性・有効性を高める活動を求められることになった。

そのためには、これまで主として専門家や一部の考古学愛好者の利用が主であった施設を、地域や学校団体が利用する機会を増やし、幅広い層の利用者を発掘することが期待された。そこで、専門家が単独で施設を運営する従来のあり方から一歩踏み出し、センターの運営に市民の参加を募り、市民の視点から専門家の気づかない点をフォローしてもらいながら、様々な事業を展開し、多様な趣味、関心を持つ人々にも利用してもらう施設を目指した。

平成十九年度に、埋蔵文化財センターでは、各種事業にボランティアを導入することを決定した。同年十一月から研修を開始し、二十年四月からは、団体見学者の展示説明補助や夏休みの考古学講座のアシスタントとして養成を始めた。それ以降、毎年募集し、平成二十二年度の三期生まで、現在は二九名が登録し、活動をしている。本稿では、活動に参加するボランティアの思いと施設側の思いを整理し、施設のボランティア活動から、地域の文化財を支える活動までを対象とする人材育成の課題を探ってみたい。

一　人材育成の目指すもの

埋蔵文化財は、「もの」の用途や技術、製作された背景などの知識がないと、一般の人にはなかなか理解しにくい特性がある。このような特性をもつ埋蔵文化財を活用するうえで、考古学の専門家と一般の利用者との間に立ち、考古資料をわかりやすい言葉で解説するスタッフが必要だと認識されていた。また、埋蔵文化財に親しんでもらう契機となる体験講座指導スタッフの必要性、さらに次世代の子供たちの関心や要望を聞き取り、運営事業に反映させることも大切だと思われた。

埋蔵文化財センターのボランティアは、子育てが終わり、時間的余裕のできた主婦層と退職者が中心であるが、先ずボランティアを施設利用者の立場から、埋蔵文化財センターの運営協力者の立場へと意識変革を迫ることが求められた。

その上で、利用者の関心を考古学に引き寄せるための体験考古学講座指導、指導技術の向上、新規講座メニューの考案、学校の授業や講座の補佐、展示品の学習と平易な言葉での解説などで、積極的な関与を期待している。文化財のよき理解者であり、専門家と一般市民を媒介するボランティアの存在は重要で、その果たす役割は大きい。



ボランティアの活動　①昔遊びの指導

ボランティア個々の応募動機は、「もともと歴史や考古学が好き」、「自由になる時間が増え、興味を持っていた文化財に関わりたい」、「生涯学習の機会」、「自分の持てるものを伝えたい」、「社会に貢献したい」、「人との交流を求めて」といった理由が多い。

一人一人の応募動機は異なっても、施設に愛着を抱き、そこを拠点に交流し、自主的に学び、活動し、施設の職員に提案するような人材に育ってもらうことが目的である。ボランティア活動が生活の一部となり、生きがいにもなるようなあり方を望んでいる。

二　人材育成の課題

埋蔵文化財センターは歴史系博物館施設であるが、展示室の解説ボランティアは、展示資料に関する知識はもちろん、関連遺跡についての知識、日本の歴史についての知識、さらには周辺文化財の知識も必要とされる。ボランティア個々の知識には程度差があるため、学芸員が指導して解説マニュアルを作成しつつある。マニュアル完成後は、ボランティア同士の自主的な学習による見学者への説明を期待している。


ボランティアの活動　②西区地域学城跡ウォーク

ボランティアに円滑に活動してもらうために、埋蔵文化財センターでは施設側に専任担当者を置き、ボランティア活動日を設定し、活動内容ごとのチームを編成した。現在は解説チームと体験講座チームに分かれ、チーム毎にそれぞれ学習や練習を重ね、本番のイベントに向けて努力することになる。普段はそのチームで活動し、大きなイベントでは全体で協力して行動する。

ボランティアの現役時代の知識、能力、技術は隠れた財産であり、施設側でこうした特技などを早期に把握すれば、適材適所でボランティア活動をしてもらうことが可能になる。これまでも、金属鏡作りやガラス玉作り、草木染めなどの講座に潜在能力が活かされた。

（一）子供学芸員の育成

平成二十二年度から、神戸市内の小学校高学年を対象に、子供学芸員育成を始めた。埋蔵文化財センターの各種催しに参加し、センターの子供向け事業について意見や感想を聞き、提案をしてもらうことが目的である。文化財愛護少年団のような埋蔵文化財に関心を持ってもらうためのきっかけ作りであるが、埋蔵文化財センターモニターとしても活躍してほしいという狙いがある。現在一八名の子供たちが登録し、考古学の初歩を学んでおり、子供たちの成長が期待される。

（二）施設側とボランティアとの関係


ボランティアの活動　③講座ガラス玉作り

文化財保護法が理念的に述べる文化財が貴重な国民的財産であるためには、文化財の調査研究で新たに判明した事実を、専門家がわかりやすく一般市民に伝えることが要望される。だが、実際博物館施設では、専門家は次々と続く事業の準備で時間的余裕がなく、見学者の対応は、ボランティアに委ねる所が増えている。

しかし、ボランティアの中には、あくまで施設側からの参加の要請があって活動するのが建前だという意見もあり、自主的活動を望む施設側の思いとすれ違う場合もある。残念だが現時点では、ボランティアと施設側との間で、双方が十分意思疎通を図りながら事業を進めるような形にはなっていない。一方自発的に自分が居住する地域内で、埋文センターの各種催しの情報を地域に知らせるPR活動をするボランティアもおり、施設側では行き届かない分野の草の根的な活動として、館外での有力な支援活動になっている。

三　館内活動から地域の文化財保護活動へ

ボランティア活動は、施設を訪れた人に対するサービス活動ばかりでなく、施設を脱け出し、地域の文化財を巡る活動へと活動範囲を拡大している。地域の史跡や文化財を自分たちで訪ね、見て学ぶ、そして伝える活動である。地域に足を運ぶことで、地域との交流も生まれている。

埋蔵文化財センターでは、ボランティアと共に西区内の遺跡の現状把握のための踏査と保存遺跡の現状調査を兼ねたウォークなどを行った。地域にどのような文化財があるかを自分達の目で確認することで、市民に周知する活動へと発展する。埋蔵文化財センターから周辺地域の文化財にまで、ボランティアの視点が広がることで、地域の文化財の保存情報が伝えられ、文化財保護と管理の実態把握が可能となる。いわば、地域の文化財モニターとして関わってもらうことが期待される。

四　人材交流

ボランティア同士の交流はもとより、異なる施設や異なる目的のボランティアとの交流により、ボランティア活動は刺激され、また意欲も生まれる。

この間、埋文センターボランティアもひょうごツーリズム協会の観光ボランティア発表会に参加し、また兵庫県立考古博物館考古楽者と交流を行った。他施設のボランティアの解説や実技指導の能力の高さは瞠目するものがあり、それが埋文センターボランティアの活動目標となっている。

観光ボランティアなどとの交流により、埋蔵文化財センターでの活動の特徴がより鮮明になる。つまり、文化財に関する正確な知識をもち、文化財保護の裏方の地味な努力をも知って、文化財の啓発に関わることにある。これが理解されれば、ボランティア活動の目的も明確になると思われる。

おわりに

平成二年に私はイギリスのロンドン博物館を視察し、そこで発掘調査の後方支援の整理業務に多くのボランティアスタッフが働いていることに驚いた。それぞれ、都合のよい時間に博物館を訪れ、土器の実測やトレース作業を行い、博物館の調査報告書作成に協力していた。ボランティアのスキルは一流であり、職員も安心して仕事を任せていた。

ボランティア意識の違いや国民性の相違があったとはいえ、それから二〇年が経過し、日本でも漸く文化財の世界に、ボランティア導入が果たされるようになった。施設側がボランティアの生きがい、知識習得、学習意欲、社会参加の喜びを理解し、良好な関係を築き、施設の設立目的が果たせるように機能することが望まれる。ボランティアには文化財保護に携わる次世代育成や生涯学習（歴史学習）など、文化財啓発活動の一部を担当してもらい、文化財保護の大切さを理解し、市民に働きかける力になってもらうことを願うものである。本稿を纏めるにあたり、先進的な考古楽者養成の実績がある兵庫県立考古博物館、学校教育と連携した活動に定評のある神戸市立博物館からは、ボランティア育成について有益なご教示をいただいた。感謝を申し上げ、結びとしたい。